

〈知性・創造性：知性・創造性を育むカリキュラム・マネジメント〉

夢の実現に向けて主体的に行動する児童の育成

～中学校区での学校間連携と自校での取組を通して～

提案者 広島県三次市立川地小学校長 原田和明

1 はじめに

本校は、広島県北部にある三次市の南西部に位置し、南北に走る国道54号線とJR芸備線に沿って広がる田園地帯にある。全校児童数52名、学級数は今年度より5・6年生が複式学級となったことに伴い6学級（特別支援学級1学級含む）となっている。

また、2小学校（川地小・青河小）と1中学校（川地中）の3校で中学校区を形成しており、3校の密接な連携の中で、教育活動を進めているところである。

本提案では、昨年度の中学校区の学校間連携と自校での取組について、紹介したい。

2 研究の概要

(1) 中学校区での学校間連携

川地中学校区では、「小中一貫教育推進委員会」を組織し、小中一貫教育目標として「ふるさとを愛し、高い志をもつ児童生徒の育成」を掲げて、綿密な連携を取りながら取組を進めている。

① 小中9年間を貫くカリキュラムの編成

小中9年間で4つの時期に分けて、体系的なカリキュラム編成を行った。中心教科として算数・数学を設定しているが、そこで培った力を各教科へも反映させるようにしている。また、学校間連携となるさまざまな活動も位置づけている。

② 夏季合同研修会

夏季休業中に川地中学校区3校の全職員が集まり、全国学力・学習状況調査や三次市学

教育区分と目標			
初期（小1～小2） ○小1プログラムを克服し、基本的な学習・生活習慣を確立する	前期（小3～小4） ○基礎学力及び基礎体力を身に付ける	中期（小5～中1） ○中1ギャップを克服し、コミュニケーション能力の育成を重視して社会性を育む	後期（中2～中3） ○自己解決能力・問題解決能力を育成し、主体的な進路選択の力を育てる
共通課題としての「情報を整理する力」			
合同研修会		合同授業研究	
各教科等での授業改善			
オリジナルカリキュラム 【算数・数学的に表現・説明することができる「図形・数量関係」】 【目的に応じて論理的に「かく（話す）ことができる】】			
初期（小1～小2）	前期（小3～小4）	中期（小5～中1）	後期（中2～中3）
【算数・数学的にかく】			
・問題場面を絵で表す ・絵から少しずつ抽象化して表す	・数直線や線分図を使ってかく（数量関係を図で表す） ・表やグラフに表す ・正確に作図ができる	・整理してかく ・計算のまきりを使って、式を變形できる ・必要に応じて図や式を適切に使うことができる	・問題文を式で表す ・表・グラフ・図に表す ・略図を使う
【算数・数学的に話す】			
・友達のを聞いて、同じように繰り返す ・具体物を操作しながら話す ・聞き手の分かり方を確かめながら話す ・途中で話す 分かるまで話す	・例を挙げながら話す ・根拠を明らかにして話す ・聞き手の分かり方を確かめながら話す ・図を使って話す	・筋道を立てて話す ・例を示しながら自分の考えを述べる ・式を使って話す	・根拠を押さえ、論理的に話す ・数学の用語を使って話す ・図・表・式などを使って話す
【かくこと（全教科を通して）】			
・経験したことや想像したことなどについて、順序を整理してかく ・簡単な構成を考えてかく ・文と文のつながりを意識してかく	・相手や目的に応じて、考えが伝わるようにかく ・段落相互の関係を注意してかく ・伝えたいこと（中心）を明確にしてかく	・目的や意図に応じて、考えたことをかく ・集めた情報を整理・分類してかく ・引用したり、グラフや図表を用いてかく ・段落の役割を明確にしてかく	・社会生活との関わりを考えながらかく ・自分の立場や事実を明確にしてかく ・相手に効果的に伝わるように細く、説明しながらかく
各教科等のカリキュラム			
学校間連携			
リモート授業 イングリッシュキャンプ オープンスクール			
「主体的な学び」の土台としての「自学」			

力到達度検査の結果について、各校で分析した内容を交流したり、正答率の低かった設問をみんなで解く活動を行ったりすることを通して、川地中学校区で共通する課題について協議し、その中で「情報を整理する力」という課題が明らかになった。

③ 合同授業研究会

夏季合同研修会で明らかになった共通課題「情報を整理する力」に焦点を当てた授業を学期に1回ずつ3校持ち回りで授業研究会を行った。共通課題を設定することにより、教科領域を越えた議論を行うことができた。

④ 小中学生が交流する活動

地域の方を講師に迎えて小5の児童と中1の生徒が外国語（英語）での活動を行う「イングリッシュキャンプ」や、小6の児童が中学

校での授業体験や部活動体験を行う「オープンスクール」の活動を行ってきた。また、昨年度より中学校生徒会を中心に企画立案をして、全児童生徒が一堂に会してのレクリエーション活動も行った。

(2) 自校での取組

昨年度は、学校教育目標を「ふるさとを愛し、夢の実現に向けて主体的に行動する児童の育成」と設定し、児童につけたい3つの力「主体性」「表現力」「共感力」をキーワードに教育実践を重ねてきた。

① 「自学」の推進

児童自らが課題を設定し、その解決のために学習をしていくことが「主体的な学び」の土台になると考え、「自学(自主学習)」の取組を進めていった。内容や量に規制を設けず、自分の興味関心のあることを「自学」として取り組んだ。表現方法もノートにまとめるだけではなく、絵や工作として表現することもよいことにした。そして、児童が取り組んだ「自学」については全て校長が目を通し、必ずコメント(評価)を返して、「自学」の成果を校長室前に設置した「わくわくギャラリー」に展示していった。

② 「主体的に学習に取り組む」授業づくり

「自学」を通して培った「主体的な学び」を土台として、児童の問題意識を引き出し、児童自身が見つけた問いから、「考えたい」「解決したい」が続くような授業をめざし、学年ブロックや学校全体での授業研究を進めた。

③ 小学校間でのリモート授業

児童数の減少に伴い、学年によっては学級の人数が1桁になってしまう現状となっている。そのため、授業場面において多様な考え方を交流することが難しくなっている。そこで、同じ中学校区で同様の悩みを抱えていた清河小と協議し、リモートによる「合同授業」を実施した。

生活科や図画工作科、外国語科等の授業を

行い、意見や感想の交流を通して、お互いの考え方を広めることができた。

3 校長の役割

(1) 大局を見据えた取組を進める

今回の提案では、中学校区での取組を取り上げた。共通の教育目標のもと、校長同士が綿密に連携を取り合い、それぞれの学校の教育実践を把握することを通して、中学校区全体で一体感をもった取組を進めていく必要がある。

(2) 学校の目指すべき方向を示す

学校教育目標に基づき、自分たちが目指す学校をどう実現していくかということについて、校長がしっかりと方向性を示し、機会あるごとに職員に伝えていくことが重要である。(その手段の1つとして「校長だより」を活用した。)

(3) 職員との信頼関係をつくる

職員に対して日常的に対話する中で様子を見取り、肯定的な評価をしていったり、悩み等があるときには相談しやすい雰囲気をつくらせたりすることを心がけてきた。職員との信頼関係をしっかりとつくっていくことで、校長としての思いも浸透していくものと考える。

4 おわりに

今年度から、川地中学校区を単位とするコミュニティ・スクールも発足し、より一層の小中間連携が重要になってくるとともに、保護者や地域の学校参画への意識づけもしていく必要がある。

そのためには、校長としてのビジョンを明確に持ち、どのような学校を創っていきたいのか、どのような児童を育てていきたいのかを、しっかりと発信していき、職員・保護者・地域が同じ方向性の中で「夢の実現に向けて主体的に行動する児童」を育成する教育活動を進めていきたい。